

野幌再生活動地では歩行性甲虫相も次の段階へ

(平成 22 年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要)

北海道森林管理局では、「百年前の原始性が感じられる自然林」の再生活動を実施している野幌森林公園（江別市ほか）の自然環境変化を把握するため、18 年度から、森林植生、歩行性甲虫相、菌類相、及び野生動物の 4 項目について調査を実施。

1 調査箇所（森林植生、歩行性甲虫相、菌類相）

- ① 平成 16 年秋の台風による風倒後、主として重機を用いた地拵を行った後、植樹などの森林再生活動が行われている箇所（「再生活動地」という）
- ② 風倒木を搬出後、植栽なしの箇所（「半処理区」という）
- ③ 風倒後、試験的にそのまま保存した箇所（「非処理区」という）
- ④ 野幌を代表する林相を有し、風倒被害をあまり受けずに現存する「百年前の原始性」が感じられる森林（「良好な自然林」という）

2 森林植生

良好な自然林については、30m×30mのプロットを設置し、プロット内の樹木の樹高・直径、植物の被覆度等を測定。他の調査箇所については、5m×5mのプロットを3～5ずつ設定し、出現する植物を記録。

(1) 良好な自然林（3箇所）

- ① トドマツ優占林
上層木の半数をトドマツが占める。(最大樹高はウダイカンバ 26m、最大胸高直径はトドマツ 67cm) 林床は、クマイザサが 80%を占めている。
- ② ミズナラ優占林
ミズナラが上層木本数の約 45%を占め、調査区内の 70%を被覆している (最大樹高はミズナラ 27m、最大胸高直径はミズナラ 54cm)。林床はクマイザサが 70%以上被覆している。
- ③ イチイ林
上層に優占樹種を持たず、イチイが樹高 15m 以下の中層で優占している (最大樹高はトドマツ 30m、最大胸高直径は、ハルニレ 118cm)。林床はクマイザサが 98%被覆している。



イチイ林の様子

(2) 非処理区（1箇所）

更新木は、ノリウツギ、ヤマグワなどの非高木性樹種が半数を占めるが、ヤチダモ、キタコブシなどの高木性樹種が 3 千本/ha 発生し、ササの高さを超える 2m 以上の広葉樹が散在する。トドマツ稚樹も見られる。



非処理区のトドマツ稚樹の様子

(3) 半処理区（1箇所）

更新木は、高木性樹種が8割を占め、在来種の定着が進んでいる。

(4) 再生活動地（5箇所）

植栽木はほぼ全域で昨年を上回る成長がみられ、コバノヤマハンノキでは6mを超えるものもあった。天然更新した高木性樹種も順調に成長している。森林回復の段階は昨年同様、「第2段階」。

3 歩行性甲虫相

ピットフォールトラップにより歩行性甲虫を捕獲する調査を実施。

(1) 22年度の総捕獲種数は、69種（21年度は73種）で捕獲数は20,586頭

捕獲頭数は平成19年をピークに減少傾向が続いていたが、本年度は大幅に増加し過去最高となった。

(2) 本年度は、ギャップ内（風倒被害木）でも森林性種が多く捕獲され、前年までとは違う傾向が見られ、森林回復の「第2段階」に入ってきたと考えられる。

4 菌類相

一調査箇所あたり50×5mの帯状区を2本設定し、木材腐朽菌の子実体を調査。

	再生活動地	自然林	無被害人工林
全調査区で見られた種	ウスバシハイタケ		
特徴的な種	カワラタケ レンガタケ	サカズキカワラタケ	モミサルノコシカケ

再生活動地では、着実に枯死木の腐朽が進んでいるが、依然として切り株や枯れた木に生息する種が多く、森林回復の段階は昨年同様「第1段階」。

5 野生動物相

自動撮影装置を12箇所に設置し、夏と秋の2回夜間撮影を実施。

(1) 撮影頻度が高かったのはキツネであったが、アライグマも多く撮影された。

(2) 特定外来種のアライグマは11箇所で撮影され、森林再生への影響が懸念されるエゾシカは4箇所で撮影された。アライグマについては生息数の増加が懸念される。一方、エゾシカの撮影頻度には大きな変化はみられなかった。



キツネ



アライグマ



エゾシカ

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター

〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10

Tel 011-533-6741 E-mail : h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp